活動完了報告
「愛媛県南予地区におけるピアノ・リサイタルの開催」活動助成

（中原豪志）

≪報告および成果≫

報告者は、下記の通り演奏会を実施した。

【公演名】中原豪志 ピアノ・リサイタル ～ピアノで紡ぐ音楽家同士のつながり～

【日時】2024 年 11 月 24 日（日）14 時開演

【会場】愛媛県八幡浜市：八幡浜市民文化活動センター Comican 忠八ホール

本公演では、スタッフを除き 170 名の来場者に足を運んでいただき、当初想定していたよりも多くのお客様の前で演奏を披露することができた。プログラムでは、編曲作品や変奏曲を中心に据えつつも、馴染みのある作品を取り入れ、曲同士の（直接的／間接的な）結びつきを意識していただけるように心掛けた。そのため、約 80 分の演奏プログラムではあったが、聴衆が途中で抜けるようなことはなく、終始真剣に、温かく聴いていただけた。

また、報告者の研究テーマであるラフマーニノフ作品（《コレッリの主題による変奏曲》Op. 42）は長尺であったものの、曲間の取り方や曲ごとの演奏時間の差を生かすことによって、クラシックに馴染みのない方にも少しでもリラックスして聴いていただくように工夫し、その点が反映されたのではないかと考える。また、曲目解説においてもなるべく専門用語を並べ立てずに、分かりやすく学びのあるものを目指して作成した。

今回、数値目標 42 名としていた高校生以下の来場者は半数の 21 名であったことは課題である。しかしながら、最年少は 1 歳から最高齢は 80 代後半まで幅広い年齢層の方に来ていただいたことは大きな成果と言えるだろう。また、地元住民のみならず、市外からも多くの方に来ていただいた。本公演を実施できたこと、成果をもたらすことができたことは、報告者の今後の演奏活動にとって大きな糧となることだろう。

≪今後の課題≫

研究分野に関して、演奏家としてどのように音楽を伝えていくかという点はまだまだ模索していかなければならない。やはり、演奏する瞬間は、研究者の視点や立場から少し離れる姿勢も必要になってくるのではないかと感じた。演奏に向かうアプローチとしての研究の在り方については、術科研究者としての報告者の課題である。

今回、教育委員会などに後援に入っていただき、各学校にチラシの配布を行ったものの、高校生以下の来場者が少なかった。公演日に、同地で参観授業が行われていたり、隣市では駅伝大会が行われていたりと地域行事が重なっていたことも要因かと思われる。日程に関しては、事前に関係各所に諮問することが重要である。

また、公演後のアンケートを実施することができなかったことも悔いが残る。終演後にお客様との直接のやりとりはあったが、アンケートによるフィードバックを通して今後の演奏、企画に役立てることが必要である。

≪その他≫

貴財団のご助成を賜ることでピアノ・リサイタルを開催でき、多くのお客様にお出ましいただいたことに何よりもまず、感謝の意を表したい。演奏者個人としての課題は多く残されているが、今後も報告者の地元愛媛県、四国で演奏を行い、広く芸術文化の振興に役立っていけるように活動を続けていくための礎になったと感じている。

なお、想定していたよりも来場者が多かったため収入が多く発生した。賛同を得られた方のチケット売り上げのうち 20%を、地元で建設予定の音楽ホール（大洲市民文化会館）の建設資金として寄附させていただいた。申請段階では考えていなかったが、地域における音楽文化の発展のために、どうかご理解・ご容赦いただきたい。

〈チラシ〉

NAKAHARA Takeshi *Piano Recital*

中原 豪志 ピアノ・リサイタル

～ピアノで紡ぐ音楽家同士のつながり～

日時 2024年 **11/24**（日）

14：00開演（13：30 開場）

会場 八幡浜市民文化活動センター
Comican 忠八ホール

曲目
- J. S. バッハ－ラフマニノフ
  《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》BWV1006 より
- モーツァルト　ロンド　K. 485
- ショパン 《バラード》第３番
- リスト 《愛の夢》第３番
- シューマン＝リスト 《ミルテの花》より〈献呈〉
- ラフマニノフ 《コレッリの主題による変奏曲》　ほか

※曲目は変更になる場合がございます。ご了承ください。

料金
【前売り】一般 1,000 円　　高校生以下 無料（要予約）
【当日】一般 1,500 円　　高校生以下 500 円

※未就学児童のご入場は、事前にご相談ください。

チケット オンライン販売 ▶
https://tckct.jp/8641/34285

【お問合わせ先】
メール：nakahara.inquiry@gmail.com ／ 電話およびショートメッセージ：080-6405-6120（受付担当：中原）

- 電話は対応できない時間が多くございます。お急ぎでない場合はメールまたはショートメッセージよりお問い合わせください。
  留守番電話設定になっている場合は、ご用件をお話しください。折り返しご連絡差し上げます。
- 本公演は、オンラインチケット・システムを導入しております。紙チケットが必要な場合は、お問い合わせください。
- 当日券は、チケットサイトまたは会場受付でお求めください。

主催：中原豪志ピアノ・リサイタル実行委員会
助成：公益財団法人さわかみオペラ振興財団「みんなの寄付」、公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成
後援：大洲市教育委員会、八幡浜市教育委員会、伊方町教育委員会、公益財団法人よんでん文化振興財団、有限会社カジタ楽器店、一般財団法人八西 CATV

Profile　中原 豪志（なかはら たけし）

1998 年生まれ。愛媛県大洲市出身。高校卒業後に上京し、国立音楽大学にてピアノを専攻する。同大学大学院修士課程を修了し、現在は同大学院博士後期課程音楽研究科音楽研究専攻（器楽研究領域）2 年に在籍。これまでにピアノを大谷美智子、藤田浩、花岡千春、三木香代の各氏に、音楽学を中田朱美氏に師事。

成績優秀者として学内特別レッスン受講生および国内外研修奨学生に選出され、若林顕、アレクサンダー・ロスラー、パスカル・ドゥヴァイヨンの各氏のマスタークラスを受講。JPPA ピアノコンクール、三善晃ピアノコンクール、ジュラ・キシュ国際ピアノコンクールほか入賞。また、（公財）よんでん文化振興財団、公益信託池田育英会トラスト、（公財）G-7 奨学財団、（一財）守谷育英会、（公財）磯野育英奨学会、（一財）TOKAI グループ富士山育英財団、（一財）福島育英会の奨学生に選出。

現課程では、ラフマニノフのアメリカ時代作品に焦点を当て、演奏および研究を行っている。活動は学術分野からも評価され、今夏に米国議会図書館での一次資料調査を行うなど精力的に取り組む。同時に、関東・四国を中心に演奏活動を行う。

このほか、秋草学園高等学校非常勤講師、日本音楽学会東日本支部庶務幹事を務める。

Access　八幡浜市民文化活動センター Comican

住所：愛媛県八幡浜市本町一丁目 62 番地 1（☎ 0894-21-3335）

〈交通アクセス〉
- JR「八幡浜」駅から徒歩で約 15 分、バス・タクシーで約 5 分
- 高速自動車道　「大洲 IC」から車で約 25 分
- 八幡浜市立市民図書館すぐ横

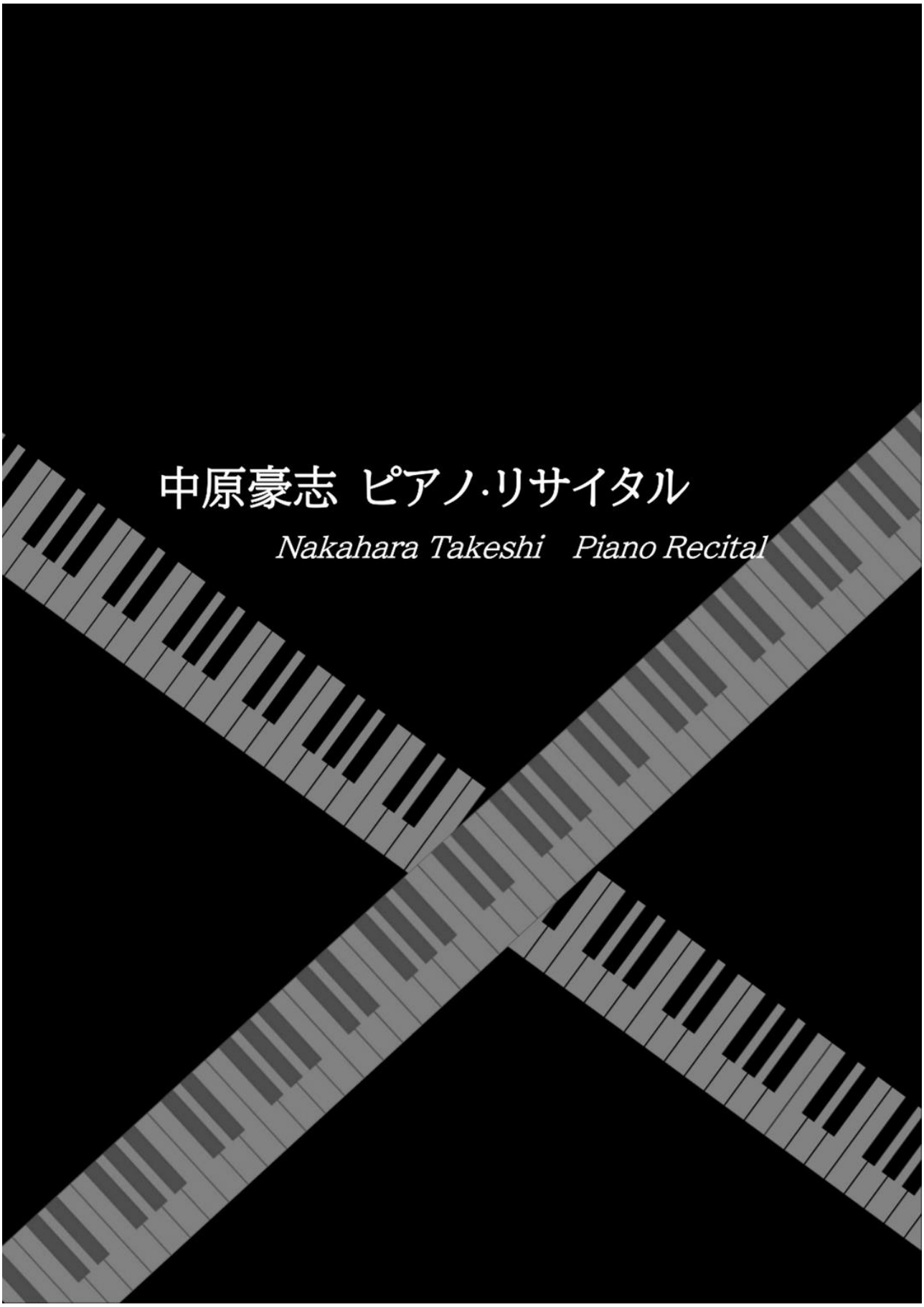
〈駐車場〉
八幡浜市民文化活動センター駐車場（無料）　　舗装部分　66 台／未舗装部分　12 台程度

本公演に関するお問い合わせ先

メール：**nakahara.inquiry@gmail.com**
電話およびショートメッセージ：**080-6405-6120**

その他、演奏会・研究などに関する情報
『中原豪志 **Website**』www.nakaharatakeshi.com

〈プログラムノート〉



本日は、ご来場くださり誠にありがとうございます。

昨年の大洲市に引き続き、今年は八幡浜市で演奏させていただきますこと大変嬉しく思います。忠八ホールで演奏するのは初めてですが、当地にあった旧八幡浜市民会館には馴染みがあります。私が初めてホール（そして公衆の面前）でピアノを弾き、１オクターブ間違えて低く演奏した幼稚園児の時分から高校生の頃まで毎年ピアノの発表会でお世話になっておりました。あれから数年（どころか10年も？）経ってしまいました。発表会の舞台袖で順番を待っているとき、緊張でにじむ手汗の感覚は今でも驚くほど鮮明に覚えています（そして間違いなく今も汗ばんでいます）が、それはあの頃からちっとも成長していないからかもしれません。

早いもので博士後期課程も折り返し地点になりました。研究と演奏の両立の難しさを感じつつ、今夏８月には米国で資料調査を実施したり、こうして演奏の機会を頂いたりと充実した活動を行うことができております。本公演に対してご助成くださった財団さま、また日頃よりご支援くださっている財団さまに、この場をお借りして感謝いたします。そして、まだまだ勉強中の身でありながら分不相応にも地元で演奏させていただけることに大きな喜びを感じております。

本日のプログラムは、編曲作品や変奏曲などを中心に構成いたしました。そこには同時代に刺激しあった音楽家の交流や、国や時代を越えて受け継がれていったという関係性などを捉えることができるかもしれません。一つの作品であっても、その中に、あるいは背後に複層的に絡み合う事象を捉えられるのはクラシック音楽の面白さの一つでしょうか。

年末に向け、あわただしい毎日かと思いますが、どうか会場では少しでもお寛ぎいただけますと幸いです。改めてご来場の皆様、関係者の皆様に御礼申し上げます。

2024 年 11 月 24 日
中原 豪志

～ピアノで紡ぐ音楽家同士のつながり～

J. S. バッハ作曲 A. シロティ編曲《前奏曲》BWV855a

J. S. バッハ作曲 S. ラフマニノフ編曲
《ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》第 3 番 BWV1006 より
〈前奏曲〉〈ロンドー風ガヴォット〉〈ジーグ〉

W. A. モーツァルト作曲　ロンド K. 485

F. ショパン作曲《バラード》第 3 番 Op. 47

F. リスト作曲《愛の夢（3 つの夜想曲）》S. 541 より第 3 番

R. シューマン作曲 F. リスト編曲《愛の歌（献呈）》S. 566

R. シューマン作曲 C. シューマン編曲〈蓮の花〉

R. シューマン作曲 L. ゴドフスキー編曲〈きみは一輪の花のように〉

S. ラフマニノフ作曲《コレッリの主題による変奏曲》Op. 42

編曲作品とは原曲（オリジナル）をもとに改変することで成立するものである。そこには、例えば別の楽器で演奏できるようにするという意図が認められるほか、編曲者の音楽的思考が大いに反映される側面がある。つまり原曲の作品の持つ魅力と、編曲によって新たにもたらされる響きという二重の面白さがある。簡単に言ってしまえば、一度で二度おいしい、みたいなものであろう。そして、編曲者がなぜ、その作品を扱ったのかという背景からは編曲者の嗜好であったり、同時代人との関わりであったり、他の音楽家とのつながりを捉えることができるという意味でも大変興味深いものである。

J. S. バッハ（1685-1750）作曲 シロティ（1863-1945）編曲／前奏曲 ロ短調

原曲は「音楽の父」ことヨハン・セバスティアン・バッハ（通称、大バッハ）の《フリーデマンのための音楽帳》における前奏曲である。この音楽帳は、長男フリーデマンのために書かれたものであり、後に《平均律クラヴィーア曲集》第 1 集のホ短調の中で形を変えて現れることとなる。バッハの時代には、まだピアノはほとんど発達しておらず、チェンバロやクラヴィコードといった別の鍵盤楽器が主流だった。そして、時代を 2 世紀越えてこの作品をピアノ編曲したのが、ウクライナ生まれの音楽家アレクサンドル・シロティである。彼は 19 世紀ロマン派を代表するフランツ・リストの最後の高弟であり、ピアニスト、指揮者、教育者としても名高い。また、編曲者としても 200 曲を超える作品に携わっている。本作品は単純な動機（音楽構成の最小単位）の展開であるが、原曲の左右の声部が反転され、ピアノという楽器の音響が生かされている。

J. S. バッハ作曲 ラフマニノフ（1873-1943）編曲／無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 3 番

同じく大バッハの作品であるが、今度は原曲が独奏ヴァイオリンのために書かれた《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》である。パルティータとは複数の楽章からなる組曲のことである。バッハの活躍したバロック時代の場合、多くの組曲は舞曲をセットにしたものであり、第 3 番は 7 つの楽章から成る。本日演奏するのは、シロティと非常に近しい音楽家であったセルゲイ・ラフマニノフによる編曲である。シロティはラフマニノフの従兄であり、モスクワ音楽院でのピアノの師匠でもあった。

ラフマニノフは、原曲の 7 つの楽章から 3 つの楽章を 1933 年頃に編曲し、演奏会でも度々取り上げた。1 曲目〈前奏曲〉はシロティ編曲の前奏曲とは異なり、華やかな作品。ラフマニノフ独特の和声が付され、バロック様式の中に 20 世紀的な響きやラフマニノフのこだわりが認められる。2 曲目の〈ロンドー風ガヴォット〉は、よく知られた作品である。ガヴォットとは 2 拍子の優美な舞曲であるが、そこにロンドー（A→B→A→C→A……のように、ある旋律が別のフレーズを挟みながら何度も現れる、詩から発展した形

式）が組み合わされる。〈ジーグ〉は組曲を締めくくる際に多用された典型的な快活な舞曲。対位法（複数の声部が対等に動くようなバロック時代に多く見られる手法）による作品をほとんど書かなかったラフマニノフであるが、バッハや対位法への関心はアメリカ時代の音楽家コミュニティからの影響が示唆される。

モーツアルト（1756-91）／ロンド ニ長調（1786）

もともとは詩や舞曲として使用されていたロンドーであるが、モーツアルトの活躍した古典派になると純粋に器楽作品において用いられる形式（フォーム）として確立される。古典派では、ソナタや交響曲の最終楽章にロンド形式が用いられることが多く、モーツアルトも好んで使用していた。本作品では、単にロンド形式でなく、ソナタ形式（提示部→展開部→再現部）も当てはめられることから、両者が融合した「ロンド・ソナタ形式」として捉えるのが一般的である。何度も登場する冒頭の主題が、異なる調で現れてくるのだが、ころころと変わる主題の表情、転調方法は円熟期のモーツアルトの妙技と言えよう。

ショパン（1810-49）／バラード第３番（1839）

ベートーヴェンよりもモーツァルトを好んだショパンは、全部で４曲のバラードを残している。バラードは、もともと詩や歌の形式を示すものであったが、初めて器楽曲のためにこの名前を取り入れたのがショパンである。なぜバラードと名付けたのか議論はあるものの、ショパンが同郷ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィチの韻文詩集『バラードとロマンス』の中の「水の精」（木こりと水の精の恋模様を描いたもので、木こりは不義理を働いて最終的に水の中に沈められてしまう……）に触発されたという説がある。

もちろん、標題音楽――文学などの内容を音楽で表そうとする音楽――ではないかもしれないが、確かに二人の問いかけのように聞こえる箇所もあり、物語性を見出したくなる。ショパンのバラードの中で唯一長調であり明るい響きは多いが、次第に内声、低声部から焦燥感が沸き立ってくる。織りなされる綾は、晩年の作品をも思わせる複雑さを湛えているが、このバラードが書かれた時期にショパンが対位法の学術論文を読んでいたという興味深い事実にも頷ける。

リスト（1811-86）／愛の夢 第３番（1850）

《愛の夢》と言えば、今日では専らピアノ曲として有名であるが、実は編曲作品である。原曲となるのは、リスト自身の〈おお愛しうる限り愛せ〉というフェルディナント・フライリヒラートの詩に基づく同名の歌曲 S. 298 である。第 3 番ということは、当然、第1、2番も存在し、原曲の歌曲は 3 曲セットである。いずれもピ

アノ版に編曲されているが最後の 3 番のみがよく知られるようになった。リスト作品にしばしば見られる転調（3 度転調）の効果が如実に表れる。なお、ピアノ版には「3 つの夜想曲」という副題が付されている。

ロベルト・シューマン（1810-1856）作曲 リスト編曲／愛の歌（献呈）

リストは自身の作品を編曲した（一度でき上がった作品に何度も手を加えるという「改訂」作業もまた、非常に多い音楽家であった）一方、他音楽家の作品の編曲も多く手掛けた。その中でも特に有名なのが、《愛の歌（献呈）》であろう。この原曲は、リストと親交のあったロベルト・シューマンの歌曲《ミルテの花》Op. 25 の第 1 曲〈献呈〉である。もともとの歌曲は、ロベルトが妻となるクララ・シューマン（旧姓ヴィーク）に結婚前日に贈った曲である。「献呈」というと仰々しく聞こえる（さらに、作品を献呈するという、音楽界隈でしばしば使用される言葉と混同する）ためか、「きみに捧ぐ」という邦訳も近年見るようになってきた。

詩は、ドイツの詩人フリードリヒ・リュッケルトの「献呈」から取られている。愛する人に捧げる内容で、「きみは私の魂、心、楽しみ」の一方「苦しみ」であり、「きみは天空」であり「墓」であるなど、いわば普通でない精神状態が描かれる。ロマンチストのロベルトならではの詩の選択であるが、そこにはクララの父からの反対を受け、しまいには裁判沙汰に持ち込むなど紆余曲折を経て、ようやく叶った結婚という自身の境遇も投影されているだろう。リスト編曲ではシューマンの旋律をなぞりつつも、「鍵盤の魔術師」と称されるリストらしく華やかに展開する。後奏にあたる部分ではシューベルトのアヴェ・マリアの旋律が引用される。

ロベルト・シューマン作曲 クララ・シューマン（1819-96）編曲／蓮の花

《ミルテの花》の第 7 曲の〈蓮の花〉は、月夜に咲く睡蓮が描かれる歌曲である。原曲の詩は、多くの音楽家が付曲したドイツ詩人ハインリヒ・ハイネによるもの。ロベルトの妻、クララはピアニストとして夫の作品を広めることにも貢献したが、この歌曲の編曲も行っている。クララの編曲は、原曲の音を忠実にピアノに移したトランスクリプションであり、華美になることを避けて原曲の持つ響きを重視したものである。曲の中で使用される「ド……ララ」という音の並びは、ドイツ音名とイタリア音名で読むと「C……LaLa」となり、クララ（Clara）を象徴するものとして考えられる。ロベルトの呼びかけに編曲という形で答えたのだろうか。

ロベルト・シューマン作曲 ゴドフスキー（1870-1938）編曲／きみは一輪の花のように

《ミルテの花》の第 24 曲は〈きみは一輪の花のように〉である。この詩もハイネから取られている。19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍したゴドフスキーは右手と左手で別の曲を弾くという（超）超絶技巧でも

知られるが、編曲もまた凝ったものが多い。この作品では原曲および詩の持つ純朴さを保ちつつも、随所に織り込まれる半音階的な進行などは、やはり 20 世紀の音楽家ならではのアレンジと言えよう。ゴドフスキーは、世界各地でピアニストとしても活躍し、ラフマニノフとも接点を持ち互いに影響を与えている。

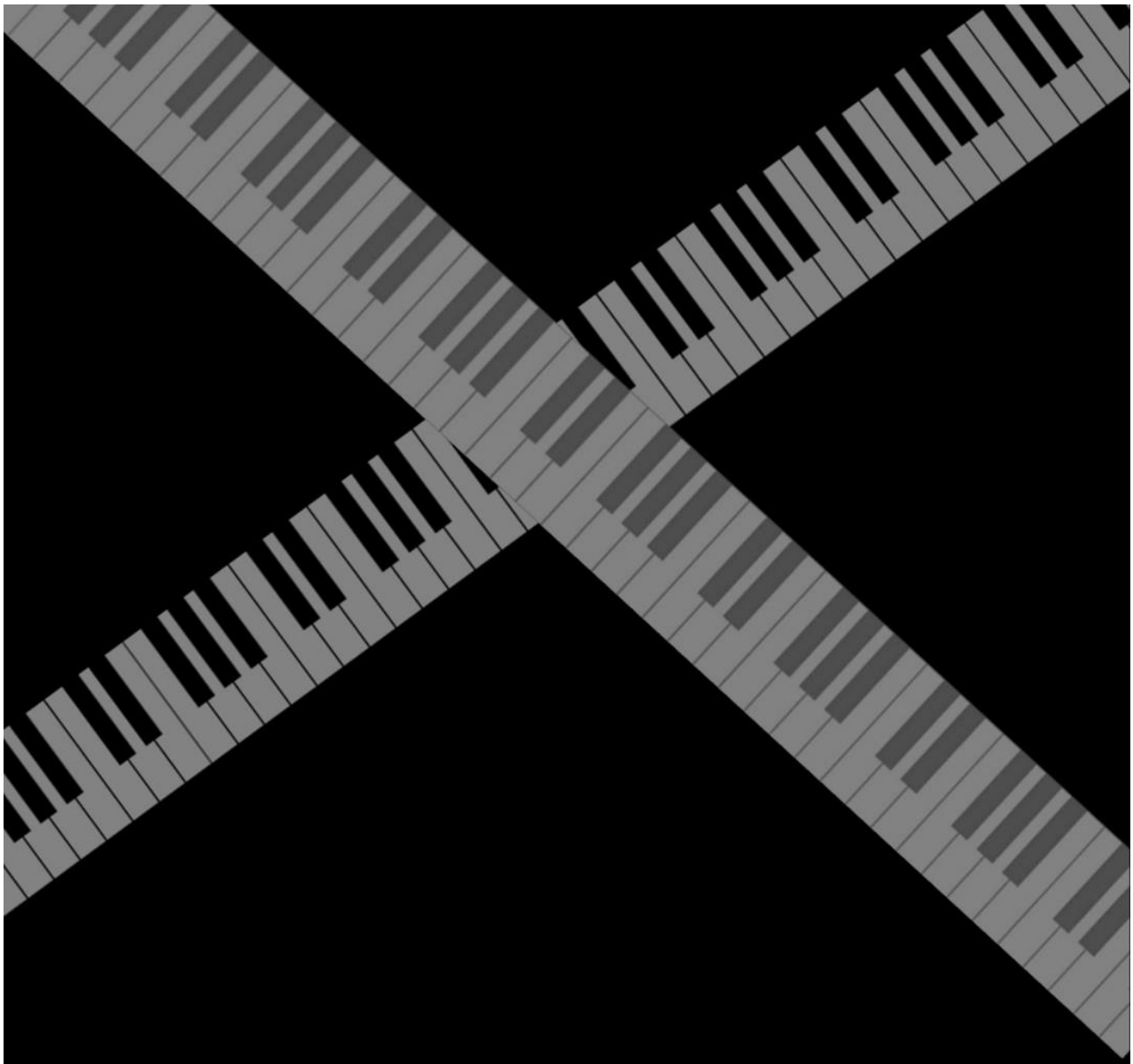
ラフマニノフ／コレッリの主題による変奏曲（1931）

1917 年の 10 月革命を受けて亡命し、二度と祖国の地を踏むことのなかったラフマニノフは 1918 年より生活の拠点をアメリカに移した。そこでは年に数十回に及ぶコンサートに追われ、ロシア時代のように創作に時間を割くことができなかった。もちろん、故郷を離れたことによる創意喪失があったことも想像に難くない。しかし、多忙を極める中でも編曲を行ったり、ロシア時代から構想していたピアノ協奏曲第 4 番を完成させたりと新天地での作曲家ラフマニノフが姿を見せるのが 1920 年代後半のことである。実際に本作品を書き上げたとき、友人には「時間が無くて以前のようには作曲できない」と嘆いている。

そんな中で、彼の創作意欲を掻き立てたと考えられるのが、ラフマニノフの親友であり、彼のアメリカ時代を支える存在、そして「一番のヴァイオリニスト」と尊敬していたフリッツ・クライスラーである。この作品の主題はバロック時代に活躍したアルカンジェロ・コレッリの《ラ・フォリア》であるが、クライスラーも、この編曲を 1927 年に出版している。その後、ラフマニノフが Op. 42 を書き上げ、彼に献呈したのである。

変奏曲は大バッハよりも前の時代から続く歴史のある形式で、ある主題の要素を展開させ、変奏させるため、特定の「型」よりも「技法」によって定義される。本作品の「コレッリの主題」とは、正確にはイベリア半島で隆盛した舞曲「フォリア」（狂気の意）の定型に基づくもの。ラフマニノフはこの主題から全部で 22 のセクションを展開している（第 1 変奏～13 変奏、インテルメッツォ、第 14～20 変奏、コーダ）。各所にヴァイオリンを思わせる音型のほか、ラフマニノフ作品に通底する「（ロシア正教会の）鐘」の響きが用いられる。一方、ロシア時代の作品とは異なる「削がれた」音の重ね方やジャズを思わせる響きも認められる。

哀愁を帯びたバロック時代のニ短調の主題を、ラフマニノフは得意の変奏技法で次々に多種多様な姿へ変えていく。創作初期段階では他変奏と同じく「変奏」として構想されていた「インテルメッツォ」（間奏曲）では、協奏曲のカデンツァさながら《パガニーニの主題による狂詩曲》（1934）を連想させる。このインテルメッツォによって導かれる第 14 変奏では、主題が変ニ長調で変容を遂げる。第 16 変奏で再び主調に戻り、次第に「狂気」を帯びていくが、コーダでは一変し回顧的（懐古的）になる。実質的に本作をもってラフマニノフはピアノ・ソロ曲の創作に終止符を打ったが、作品にほとばしるエネルギーからは、彼が作曲に熱を入れ、「作曲家ラフマニノフ」としての再起に向かう姿勢を感じずにはいられない。（解説：中原）



2024 年 11 月 24 日(日) 14 時 開演

愛媛県八幡浜市:八幡浜市民文化活動センター
Comican 忠八ホール

主催:中原豪志ピアノ・リサイタル実行委員会

助成:公益財団法人さわかみオペラ振興財団「みんなの寄付」
公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成

後援:大洲市教育委員会、八幡浜市教育委員会、伊方町教育委員会、
公益財団法人よんでん文化振興財団、有限会社カジタ楽器店、
一般財団法人 八西 CATV

中原豪志 Website
https://www.nakaharatakeshi.com

〈記録映像〉

公演の様子を手持ちのビデオカメラで撮影したもの（5 分ほどにカット）です。

https://youtu.be/HbV1kDuPmlo

以上